



俳諧一葉集

5  
2179  
5



門 利 5  
番 2.177  
卷 5



能譜一葉集附合之部四

元禄五壬申

其多也餅工等すの様の先  
りそ古 高き一屋の所し  
善父入ハ只 蘇入と尺さくけ  
りくさみあり 第一 持こ  
却、物有物 (一) 写しあ  
何と吹ぬ手 毎のあまの  
考

古学庵  
幻窓  
坎窩



箱

烏  
 雲の倉すくうつ村北をき  
 基多む百千もたさきあひ  
 くちくしと音する物をみちやる  
 瓦りよ能の能形 朱 就  
 二三季まのハ第北をく  
 髪をとくやーく尺ちふく良  
 守美うそけけつつける雪の月  
 襟おるきぬハ角力えの帯  
 今よ田一ゆくやー原の雪まて  
 夜明の雪のまこひと川はら  
 歩供千雪陰今も花くろる  
 白心はーと紅の飛入  
 考 考 考 考 考 考

二  
 陽たの傘をす側くもえあう  
 手紙と持て人の名を 句  
 本籍、おれハおの(加)きう  
 善をとくハーと紙をつとて  
 ね風のすん(と)くおまこ  
 折ふらゆくと告口門 考  
 湯ハあはやハ二束ふるま水研  
 百一匹より箇とまをゆゆ  
 小瀬市のおうくたるなま三人  
 痛、あけまハ女あとうも  
 ちていす洋ハ月の入り  
 何の枝く故村の 考  
 考 考 考 考 考 考

二の丸の支うくやく重層印  
向もあうくして舟人の節の  
さくしと縁後の倉を喰ひぬ  
口とゆふしてくしり着堂  
又舟の節のさくしに吹抜い  
き片を抜しのゆき喜極

菊、菊、菊

多きや小館のやま二段漱  
極とすさる岸のかり株  
又知らしてきく学ばもえわく  
刀の柄うくくした

湖風  
菊  
沾蓬  
利牛

倉の後の後を呼ぶくおの自  
小楢りもた本橋の丸也し  
強一又く二強をくく花  
菊弱の色のはやく改じり  
あくくの末を展の幾  
尺のぼくの子供くしきい  
古くすくくくくくくく  
ちきくくくくくくくく  
森を焚く沿う喰ひぬ  
月影の向く佛の基は  
ぬき人涙く草の節の

菊、菊、菊、菊、菊、菊、菊、菊、菊、菊

宵掛の峰のうら花のや  
うら心も時可有きあみ  
良

あのみ年 松と横や字の餅  
菊のうら心 葉多の火  
其角  
山の間あつた 陸のゆき  
葉のうら心 菊のうら心  
風心やうら心 菊のうら心  
侍事にお撲のおあつた  
帯のうら心 金のうら心  
空 菊 角 葉 菊 其角 風雪

菊のうら心 菊のうら心  
豆のうら心 菊のうら心  
海老のうら心 菊のうら心  
刺やうら心 菊のうら心  
まけうら心 菊のうら心  
ふらうら心 菊のうら心  
尺のうら心 菊のうら心  
虎のうら心 菊のうら心  
一通りのうら心 菊のうら心  
白のうら心 菊のうら心  
暖のうら心 菊のうら心  
お殿のうら心 菊のうら心  
菊 空 菊 角 空 菊 角 空 菊 角

船を浪よこししおのたし  
堤灯をゆるり河の入り  
女房ふ米屋の専らこゝろやふこ  
う田の喧嘩をやわらし  
ふをよみ一舟の歌に抜く  
あの子は母をせつこゝろの中  
にのけりおの田舎 階尺  
とめよりと夜に入月の多雨渡り  
いこころとくると晴のゆき  
瀬のちる四の折草の素の表  
十人すゝめひる万見守

一いはいは戸を尺とる小高の  
みくくくく返して神の門あ  
紫よと未末を柳のむけ  
三人笑ふ妻のむくく

芭蕉危倉

風林のまじりて風吹くやめ  
旅の草鞋よりのおのちの空  
砂川のひらき又空のかがみ  
門ちりひする響きの森あさ  
月の夜を尺とるぬたも喜りし  
志るおのちのむくく

涼葉

空 角 菴 空 角 菴 空 角 菴  
空 角 菴 空 角 菴 空 角 菴  
空 角 菴 空 角 菴 空 角 菴  
空 角 菴 空 角 菴 空 角 菴



猫の尻尾さける旗の重  
確珠の若子孫の所  
ひふくしうろ中をされ  
きけん本一酒もささ  
やふやふしおまを返す  
弟をさふふ人子怖る

重 榮 然 子 良

おのわねをゆきし  
おのこれしと地割  
休るしすめふ月  
廊のいひましゆ

史邦 沽圃 翁 真可

をやういふ海息子の勢を  
粟丸をきく川上の山  
ころくしと取のゆき石捨ふ  
ちやうゆれハ片の麦  
西さうさうく吹くる  
祖父のゆきし粟丸  
子洲のれ食を種  
結るをかくる手  
ぎししとまふは  
尺書をとてめて  
珠持を戸塚の  
後殺病のさう

沽 可 翁 可 沽 可 翁 可 翁 可 翁 可 翁 可



寸人寸寸と苗代々々む花の色  
 光る可くはぬ佇想のまの  
 幸風上吹走りゆくが影ゆゑ  
 質子ふりゆく百あめ家  
 以る所く獲る魚大化糖一  
 蕙一くくくく白雲塔の影  
 蝶去厭解あさそいさ種の家  
 弁當屋くくくく居必布  
 くふるみみみみみみみ  
 名古きくくくく魚載の舟子  
 悴くくくみみみみ松の下く  
 殺をぬくくくく自蝕

可沾 可沾 可沾 可沾 可沾 可沾 可沾

か志とぬの上く人ぬの志みし  
 おくくくくくくくくくく  
 物めくくくくくくくくく  
 文と小望くくくくくくく  
 向海くくくくくくくくく  
 籠くくくくくくくくく  
 塩ぬくくくくくくくくく  
 奈良くくくくくくくくく

乙里 乙里 乙里 乙里 乙里 乙里 乙里  
 州州 州州 州州 州州 州州 州州 州州

可沾 可沾 可沾 可沾 可沾 可沾 可沾

史邦 篇





伏見のしりも之袋の底抜て  
矢一のことふも言あうし  
月影の居あまも鳥帽子  
扇の舞の古のうら  
花咲ハ木下めな引すうて  
わらうもうぬまの菊池

扇 扇 川子 扇 扇

初葺やまこりぬ終ぬ秋の家  
まきさしきり 濁の菅川  
那ふう居村の夢地きさうて  
さしこむ月と瓶の蓋

篇  
袋水 史邦 半蔵

塔付の餅くふ海の水  
持るこころの草の心ふと  
とまうは出持ゆきう夕智  
須江の道隔く流ふうの宵  
井田の菜も思をく石の上  
やさしき色の咲るあし  
よのけの露も思を丸く糸  
物さしらうつさき足音  
月影の向の障止星ゆり  
子鶴の徳の信あく新大臣  
狗走やうと起さうて秋の風  
春の赤子をいすう小坊主

扇 扇 水 水 扇 扇 水 水 扇 扇 水 水 扇 扇

花のよからん 尺のくさるる 出のよ  
ほろふ 女中侍の けり けり けり  
春風 吉野 鼓の けり けり けり  
春の けり けり 伊丹 けり 白  
琉球 けり けり けり けり けり  
見れば けり けり けり けり けり  
尺のくさるる けり けり けり けり  
嫁入 けり けり けり けり けり  
袖の けり けり けり けり けり  
月と けり けり けり けり けり  
春の けり けり けり けり けり  
けり けり けり けり けり

菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

かゝるる けり けり けり けり けり  
尺のくさるる けり けり けり けり けり  
出店 けり けり けり けり けり  
干物 けり けり けり けり けり  
手拭 けり けり けり けり けり  
羽扇 けり けり けり けり けり  
人づく けり けり けり けり けり  
あゝ けり けり けり けり けり

菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊  
酒 菊

昔の月柳のうつろふがよきて  
 坊主かゝらぬのえりて  
 松山の橋は流るゝの哭く  
 椿燈の影をさす川舟  
 鏡山舟の涙をくく小豆粥  
 あらう月影をいしはふ袖  
 掛をくまぬの心を持て  
 翠の庵に尺をさすこゝか  
 空嶺より山雀の籠の中  
 西寺の雲のむねの静さ  
 月のごとくに先をみるや  
 きゆるるるるるるるるる

嵐 水 堂 翁 堂 翁 水 翁 堂 翁 水 翁 堂 翁

情すのよき花の雪の初月  
 水智のお山の暮おそく  
 弓はしめするるるるるる  
 宿とくすすすすすすす  
 二 所中のまなはの森くき  
 火もさするるるるるる  
 葦の袋に地を踏む秋の  
 伏尺のくくくくくくく  
 玉のまのよきまきけは  
 香の流るるるるるるる  
 山依を切してけしるる  
 燈持おのあしぬるの中

水 翁 堂 翁 水 翁 堂 翁 水 翁 堂 翁 水 翁 堂 翁

つふ合ハこれ上戸ヲシ飲所ナリ  
きくもくしとあはれ珠とこ  
のり物と和当ハ礼子所ナリ  
之こ欠し所ナリその大目  
様柄ナリ多田と書ハ人の所  
むしる片石と籐さけぬく  
不所ナリ池鯉鮒の所ハ木沼市  
杉葉とくえと云ハ古の如葉  
宋五休人ナリこれナリ也尺さん  
きしのむろり子きほりもも

水 葉 弱 水 葉 菊 水 葉

新株ヤ多田の上ハ秋の也  
きくもくしとあはれ珠とこ  
のり物と和当ハ礼子所ナリ  
之こ欠し所ナリその大目  
様柄ナリ多田と書ハ人の所  
むしる片石と籐さけぬく  
不所ナリ池鯉鮒の所ハ木沼市  
杉葉とくえと云ハ古の如葉  
宋五休人ナリこれナリ也尺さん  
きしのむろり子きほりもも

西 昌 景 弱 水 葉 菊 水 葉  
西 昌 景 弱 水 葉 菊 水 葉

田堂

小竹の内伐かこぶ幼  
籠も幸れと月待の意  
梅子とほろ湯のらさき  
糸といふわく三方の慶斗  
花のうけ射末や瑞防くん  
燈より月のつらうき

臥高  
探志  
遊力  
野徑  
去来

十月三日許六亭無り

くさくさく人をもとくこれ初射  
中と仕付くら麦のゆき  
酒ををきん小粒の吹雪  
汁のあま〜川舟の風くれ

菊  
許六  
酒堂  
盛水

高の月おく〜入行と古  
先工丈すつ故帳の約や  
才計の傍中〜惚れ  
焼こ〜〜小流りも〜  
標つむ筆の紫を〜  
糠礎をのほ〜素白の入口  
木分ハ〜〜〜  
船抄のけ〜  
舟〜  
八月ハ船〜  
焼山〜

嵐景  
執事  
水  
六  
葉  
水  
翁  
六  
葉  
景



少霞すさくけも花の本うけし  
けくも長馬の卵の卵  
去深く遠老の宿妻の門  
高麻燕を編り破す  
さしとく一かす手  
歌名は長持の上  
灯火の影めつーき甲侍  
山はとくきん山を如る  
吹をえ手魚のま焼ゆ  
尾目かよふみすの女  
いりやれ燕とまのふりす  
野をうえしあさのり

水翁六堂水翁六堂水翁六堂

る句を思沙門老の小方丈  
舌のよん々如旅良  
一すらとまふ葉のまふ葉  
藻すくふる葉根流の坂  
宗長のうねす白く葉の法  
葉くすくすまむ百姓の家  
七のまふまふ廻る解糸宋  
七十の葉のまふまふ

六堂水翁六堂水翁六堂

許六亭無行

二日ゆりー宗澄の宮意葉一斗  
宋玉外の八亭主の体命あし



了士をわしの悉はしきけ戸のそと  
 月夜より契を洗ふとみわし  
 火とんしと石のしと子所を  
 先積可くる手の物 朱  
 一つたしと門の尾手重海に  
 高観方手かく崎をえり  
 くらやの学朋物をえ連立  
 車りの捨手沼まかくし  
 一垣手木をゆゆの堀の内  
 夕ハ森くわる二月 菊  
 神花手伊勢の蛇の糸をえり  
 栢持よりやく字川のの上  
 景 菊 六 堂 菊 景 六 景 六 堂

支梁亭口切

けきしに堺の庭をふりしき  
 笋尺とよ美のそら 景  
 山雀のさし強くふ子と外  
 秋の叶のさしくぬ 取  
 旅人の影の月のめりし  
 大戸をゆけしむる 裸 為  
 籠の玉子の良を青 括 一  
 阿のさし櫓を流初りし  
 みるさし六田の板より桂し  
 うけ葉妻矢くお豆のけ  
 支梁 菊 景 六 堂 菊 景 六 堂 菊 景 六 堂  
 利合 酒堂 盛水 桐実 也竹 菊 梁

こぼるる雨も志ほく蝶の羽  
僅くふくく虫坊の楳  
たしくと階落しる石の上  
海し乞食のやまやすお月  
行雲の長門西を秋立  
あやう朽けむ一腰の清  
あや入花を流の百半床  
萱の二葉のやうてけのゆく  
朝をハサキのり柳の魚をれて  
先りやうこし舞の巻の巻  
咲初て春のふゆうと猿  
きのの派の枇杷のうすい

合 堂 水 葉 堂 梁 竹 案 合 堂 葉

凡果しく預ましくあふ旅の初  
きよけをうはまをたう社家町  
あさうに鯛を煮るをう  
みよりの房此あふ川に  
あはまの綿の帯う肩守  
らん美をうう門あ坂  
波をよの物煮し喰ふ香の月  
上毛吹きうまわの響  
谷傳ひあうけける竹茂  
方刀持けうう二うらあ  
物言すうこれ勢におるの  
登りかきう丸葉の魚

実 竹 堂 梁 合 葉 箱 葉 竹 堂 梁

花さく 湯室の河の人通る  
麦と 菜と 木の影を 踏む  
秋

荊口

酒堂

翁

此筋

左柳

大舟

千川

翁

木ろくろくにうめを 百をたへ入るは  
毛をひく 野のなをすく おふ板  
掛乞の中 独るをすく とうかまを  
まへしハ 本後たくこら  
梨の枝 おもくをぬハ 雲の月  
輝くいろく おふ 草かろの 花け  
秋風す 架 橋の 庭の やと  
雨のこころ 梁の ちろ

六月のりも 照はる 柳の木  
手ぬの 入し 花 鏡ゆき まる  
架 湯室とくろく 豆を 供する 湯去宗  
箕 向の 流れ 北くもる 山 陣  
花 子をもの 駒を おろす 舟の 影  
俵す 豆の 葉を 志こく 秋  
月代も 小くく き里の えあれ 隙  
子 鏡ひく えし ころの 川く  
石を ちり ちり とれぬ ちり  
雪の 上す ちり ちり ちり

壺

板

筋

川

壺

筋

板

翁



夕有る為鶴をふる子鈴の音  
 聲ふるハする雙の如く入  
 麦の文の如飯を承けけし  
 陶引する川舟の袖  
 怪子千風も涼き中小姓  
 ゆり所返るの音を責むる文  
 美しき花の匂心を似せしん  
 人同子くらと引くく珠の  
 一息子地之橋取の花さう  
 怪子千のさきすきとさきとめく  
 雪そのころの弓のひびき  
 果且帳を鼻残の百

其角 壺 角 壺 其角 壺 壺 壺 壺 壺

十二月廿日即興

少くも入招れ梅山系  
 海とむかしの初望の右  
 月千の如浩く音を引之  
 雨折のさきすきとさきと  
 夕月の花のさきすきとさきと  
 出代さき秋そを片き  
 因りふるきめえいゆ樞の音  
 肩の善く加り昇り親  
 足え子葉のさきすきとさきと  
 夢を煮く廻す海渡の音寮

翁 其角 壺 角 壺 其角 壺 壺 壺 壺 壺

二張の反麻足しすく枕し  
 けめよの猫の男をひきめ来る  
 ちのしやうこさし也嫁の息  
 現は度とをやせうこ  
 夜の雨のさしをさくさくむ  
 三寸の跡もききしむ 唇  
 まいしつと瘻をもさわう節の月  
 おろつあつおあつ友を秋の夜  
 言ふし水もゆけつ戸植  
 山よのこころししつらハ静し  
 妙つら可つら合歡のい書

山 隅 崇 角 隅 崇 角 隅 崇 山

かけむく山探るる床のいしれし  
 ねえとぬ船子屋の以待  
 暮るやと骨洞穿の空うら  
 魚子も子いしつら多も焼  
 尺ぬふりのこま人の息をむれ  
 すここまかかきしつら可くさ  
 現しよと星を散て散の月  
 けしつらけしめあつ信ふ  
 相尋るも近江流うらハ海山子  
 息吹れりもえこしつら  
 志するハ海邊よりけしつら  
 心よ名あつしつら何れハ楊花妃

山 杏 隅 崇 角 隅 崇 角 隅 崇 山



付さしと申してさうし柳の色  
柳葉の影のまろく三弦  
山

深川芭蕉庵

有代をいそぐやうにむすむ  
小松のかしら梅も冬山  
牡鹿の能登の遠野の字に九丁  
久吉白子海平如川  
泊之小松の板屋と一里  
物より登むむり五月雨  
花

千川

翁

此翁

左柳

酒堂

海動

感水

川

望とれのお娘ゆりむす難う  
ふと急ぐいさむ大海  
言節を年穿鑿するまら  
居風をよめる雪の降出し  
胸くさ箱をみくすけと籠  
情なき病のあつたゆり  
伊豆の海みきむら船を潜入し  
一夜の法り宗有定

翁

嵐景

柳

筋

物

水

川

翁

昔不二や五月海々二里の松  
茄子小角豆もおのり色志

孝老

老翁

解の子に花を巻く瓜のかさうて

菊

空の鳥の疎とやうやほ大相

群六

夕のさし影の如きもの

菊

月とまぶ音うらまを聴て来り

嵐茶

手もも花をりし柳の花書む

酒堂

猿ののせうら影籠のこやし

素堂

音の有よく室の室の居りて

菊

よの中をいそぎしうたうら

甚角

小誓信けしあふらん香の香

流ゆたうらに仮のあふもの

溪石

ゆきさうら影のひのあふりて

菊

留るうらうらあうら

善船

筆をいそぎしうたうら

盤子

いりも白濁し出湯の如き水

史邦

竹槍の葉うらに並ぶ月の光

去来

胸すうらうら子給の如き

又草

元禄六夏酒

涼葉

あうらうら河縁の非を志る

まこ黄きしうらうら

千川

川音の流あうらうら

菊

うさあふゆるあぢの  
 秋風よむらあをささく素き布  
 虫と雨夜ハ同じくあつらふ  
 机亭く瘧の方とこつらふ  
 多か干き髪はけし悔めり  
 尾吉の志尼ハひさし髪剃る  
 奈良良ハむらさきの中こころ  
 掛つてさう小油の燈をともし  
 きのの巻扇を望みのあくさみ  
 尺の後の源也一歌の志のけし  
 控してふききやまを伝正  
 出来合くとけおの料理を廉あし

宗波 此篇 湯子 紫川 子 紫川 筋 波 紫川 筋

三十五

ぐさしてあらく肉屋の  
 物有る花の糸物せりき  
 白けの扇れ糸はきく  
 石巻むき尾のたぐさく  
 地元の板子尺ゆつ名苗字  
 夏まつハとくぬ麻のきをき  
 寺のいりえハ四五反の秋  
 夕月ハ板木作りむす堀の破  
 尺よる糸をきく  
 先くあつらふ信敷の一纏  
 是しあつらふ子の手  
 一つあつらふ葉のきく

筋 紫川 筋 紫川 筋 紫川 筋 紫川 筋

三十五



けりしと和の浦の初  
秋とてや外ははらうし  
清洲とてす子の身  
在りし事さむれハ  
狐の棋もさうさ  
志の志十六  
以干干わくも  
学卑の一人ハ  
先手拵る  
むりしき  
丸はす  
況きと母

良子牛坡紫翁坡子牛坡翁良

本強  
是坊  
麻  
念  
四  
義  
男  
翁  
切  
坊

良子牛坡紫翁坡子牛坡翁良

五人技持たし之とて、柳うね  
夕紅く子さるの音  
猿曳の身をちるに山こして  
そくくをくける鏡子の影の  
暖くあつても河舟ぬかの  
酒利みあつて酩酊をのび  
丸三季結くく結くもいそいで  
境のるるすけはとて、皆さぬ  
古白く松と橙ともこのま  
りきき冬のうら、絶て待ま  
履腕の薬を一向指付る

野坡  
、箱、坡、箱、坡、

蕨入をいであつて、れて位  
寝臥も熱うすする秋文  
く又おかすす原の力りけ  
口（く）とて、の海をくらる  
ちの山、佛く、野のとも、火  
吹を、十、舟の若、菰あ、新、  
た、や、藤、え、け、と、指、志、を、  
さ、く、し、と、と、と、ぬ、あ、ま、の、風  
捨、か、ま、し、し、と、夕、の、ち、く、し  
行、義、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
焼、味、塩、の、灰、吹、を、く、ら、つ、  
一、振、く、ら、く、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

、箱、坡、箱、坡、

ふと小巻かろつらんと遊  
かえくろを黄ひこ中戸きし祝文  
むろしの紫羅くハ若くやむ  
市原千そこえりふりくま  
神おむりる夜り言と以  
月けけし小岸仲野のさそい書  
はるまのあそびをむかへる肌書  
えくくいと桐の葉落る手あけ  
土付く何と巻の終り古々  
水とりやあこされて幾振り  
猫可きりる人そふん一と  
何のせとあぬエ丈と何ぞあつハ

掃月めふりいろくハ城

箱、坡、翁、坡、翁、坡、箱、坡

三十一  
九

八九百ちり雨降柳り歌  
まの物れさけけりる春  
初病しうそまふあいの羽折る  
肉をよとさつと吹ゆ振る  
きのふくくおるまる月のつら  
狗背うれし肌書くハあ  
志ふ柿くくハ風くあけり  
除く法とる祖父の傍 跡  
招きまうハけけりる 旅 刀

翁

治圃、馬寛、里圃、治、翁、里、翁、翁、翁





子川と火入千蔵すくふもの  
花はくちや袖はぬ喜のちんられた  
瀬のしらのなる陽片の水

里 黄 沾

深川にやうして

孤屋

空豆の花はくちくち麦の隙  
屋のまの群のけしつ海川  
上張を通さぬけのあつち  
そのいと歌けは海の家 中  
宿をよほしけしあぬ宵の月  
きくくくと唄のころふ秋風

牛 屋 菊 利 牛 成 水 菊

咲の仕より此工又するし  
妹とよみ愛くくもくくく  
信おのけくえあみをや  
風不きくおの鳥の鳴く  
奈のふうれし法をえりけり  
解汁美のものをくくあつち  
系のくち豆をさけくあつち  
此妻はくちやう花の静ふる  
くれし物さくちをくち  
きの法吹くくくく月  
不願丸めし物くちのたつ  
不願丸味と中おくちくち

水 菊 屋 水 牛 屋 菊 牛 水 菊 屋 水

くつら切髪をよめくす  
位子のしきりふもきし海ちあ  
玉わすれくすきを尋る  
夏のおくすらんてふか汗をか  
室を送るすけり智基  
くのおくすの跡ひさきし尺の  
手首はゆきとわたりぬる  
息災子祖父の白髪めくすよ  
世思争くぬ七夕の思  
名月の百と念をくす芋島  
すくくしきしあき草河  
はくろくおの通りくすす

牛 瓦 菊 水 菊 屋 水 牛 瓦 菊 牛

山の根際を死くすくす  
横をくすくすく風の吹あす  
きくくの上くひくくす  
おはくくし女子はくくす  
よの字れくすくくく

水 菊 牛 屋 水

十三夜曉やまはけし  
小袖の袖くくくく  
焼飯子瓜の粉漬く  
花散麻のかくく  
高き付くくく

濁子  
曾良  
菊  
大邦  
秋風



枝もく菊の揺ららひきよ  
花のあつたをけらるる香の素  
階のわすめをけけの青  
初春の七人の御子安うら  
かりし屏風をくううう  
花のうきとちかたううう  
とや強合の花よこり子

紫子良水風紫

十の初見とくううけ  
鶴のよの阿とをかえりさ  
をそり鐘階袖をさみけ

菊  
濁子  
盛水

肩の掛ひし米の掛次  
尺之目ハ尺根の思切  
青葉葵の魚の田舎め  
すつきのまふ女房の魚  
夜すうのめうす山  
若皇子子けめう  
そりの舟しきのり  
船の菜と糸ふか  
化物ぬ梅掃子  
椶の枝おるし  
姨すらうける存の義入  
ひく位古の伝をきけ

依子  
水子  
水子  
水子  
水子  
馬寛子

うらみくろくやひり家のか  
あふく十月を色も花さく  
瓜をまきく福話のゆき物  
手紙を津波のふ人う河  
志厚しうふれハんまかく  
持付ぬお右刀を右手かこさ  
ふれハさねくううのふり  
友川のちや音の激を踏ち  
足祖のや一ふ力を尺ほ  
香立ん子木の芽を積さね  
厚と大るうくくけゆくみ  
雨化の姿似るう水う

常良 水 花 翁 子 良 涼葉 子 翁 紫 子 翁 紫 子 翁

大原の紺色里子久き  
数おなくつふけハ牛と富も  
舟のみあそに鯨を  
初叶向六里の杉を傳ひ来  
志う子鞋のゆめりや  
釣こも水籠め起すおさめし  
竿ゆきすあめまきの花  
さあハあまのくふむの山  
去風さくす谷の海布

翁 紫 子 翁 紫 子 翁 紫 子 翁

新元月廿二日川を原興  
振るは原ゆれしきハす海

翁





和田秩父ともいふる若意  
 掛乞の末にハ初をゆりしけ  
 よそよとくき月々枝打戸  
 虫をくくして靴耳の履れ  
 松とすしきと念佛のくぬ  
 宿ハ形いのちあうくく  
 破籠ハさ久ぬくくひすの  
 手由を喜中しるの法ふれ  
 口記つる一帖の紙  
 旅舎や長ふ五月の和伯り  
 名跡を可きく安藝の唐色  
 する竹ハ尺くぬ伯母と懐く

紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子

え米こころ酒の真  
 旗立し庭子籠する雪の月  
 走くくまくと組重く不  
 去る聲ハ仮能出更子籠ひ  
 くふ片そ居のちて庭する  
 よの結も持ねをもめし流す  
 紫菀子 壺子 床のかこ  
 時をすくやとぬ帳を物  
 物多るくくお折田の物  
 手雪の上りゆふれのこと  
 徳の唐もくくくももの  
 折花子 子世のする袋 何

紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子 紫菀子





坂の記をいふ心電 矢  
手よるしはは是程の初可し  
位で海の花散りまの  
望しつと梅干風のぬらさ  
踏めず人の蹟をふやの  
月とぬハ親干不足のやま心  
そわれて家ハ何ふくけし  
候し到て置えくハ縁縁  
仕分て病き舞才の言  
田と桂のむい近江の縮のやま  
下巻より一宵の神唱

此中並翁不滿意句多故不満韵而  
坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁

終云

生ふうういふ山にわける生海流  
名けハ白く空の菊の  
代古の候候きあかしの力を足く  
五風花梅の梅を八うら  
酔の箱を折れハ海に引こけり  
ふふと遊てふくす  
親の世をやう一醫者の水身  
中一き舞の庭のく  
香簾の可くつと  
旅し物ぬらさ

水 翁 水 翁 水 翁 水 翁

麻衣をとりし見ゆる木曾の谷  
井端の河にそくゆる風季  
何れもかた可くゆる海に月清く  
流るゝ又し暮し細口あけし  
造りきて村をすくちの海  
まけしをくぬく流るゝ疾  
初むのさしふまきハきりく  
修加路長果の山のくく尺の  
水風 水風 水風 水風 水

引居る河に乳水  
おのれのまきく枯るまき  
馬寛  
治園

三味線さける旅の気合  
夕月夜空を照らす文一ける  
ふすかふすかの秋まききり  
あやあやの流るゝ流るゝ流るゝ  
大貴の葉井幾許りくまき  
力まきく旅をまきくまき  
旅まきくまきくまきくまき  
村にまきくまきくまきくまき  
つれなきまきくまきくまき  
物か跡十二かまきくまき  
伏尺の橋まきくまきくまき

懐くさんし入る友羽衣  
親仁しとふれうきう  
月せの青うし仕せうを皇鼓  
霞冷くらして餅ハ破り  
涙あゆとくく(最の妻の風  
門のたう)ハ丸籠いささる  
舟の舟し一却る雨の降一通り  
菰(う)葉をわすれ浮丸  
鳥てふおおおおおお  
雲の狗江の山とまま  
入りて松さるく(う)竹  
佛(は)を神をうけすと

菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁

墨紅の小袖ハ襟のあうり  
吳洲の桑燈を愛すわさう  
あつたの二時をたうす  
月を味す一癖軒ときく  
紗(う)物の一室足ゆのさす  
楮子破るる袖子のきり取  
秋の虫糸(う)し(う)松功者  
春加帳子(う)つらぬあうり  
不乙候(う)を山の新三位  
回令(う)谷子(う)り(う)黄

菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁 菟翁

雪やらの雪のいさる改申すし  
木の柄子水のよ 拭 秋風

庭うらし木きうりけりあけり  
秋木てうらう 獨善の 城 依 盛水

約しハ布多を羽おき月の  
研いし控の睡の平判 曾良

高ききりて紫の礼を志し  
何しむ麦ハきの糸うこみ 野水

白檀の梢ハち死林りて  
髪をきりても糸をゆるし 良 菊 水 風

燈籠つ物人のむしお押さく  
ゆらゆらととるうらあつ月 良 菊

数えくしゆゆえうおま  
出家の物をやり上りし 城 良

海鳥といはらうらあつ月  
糸子の湯のさあしゆく虫 依 良

初むハ巻揃りいそふれ  
堀のつ木子うらあつ月 執事 坡

いそみまの影引けりあつ月  
そのよきむの雲ふりて 里圃 依圃

大根のそとぬこりあつ月  
上下とも子お糸のむ 秋 馬寛

何きうに月尺の枝の葉め隙  
高ちうくしと通るる次  
里 估

まうれしゆえ葉をの枝しき  
其角

出代の新物を手よくかきさう  
石 翁

梅の葉や通るるれハラの音  
毛 純

土を漲るしや花 晴る  
許 六

陽光を映るの牛の枝ぬけて  
木 導

長門のや音のゆりたニク  
利 半

赤うすくやく結子の細か  
成 水

葉のうすく葉の枝をきく枝  
翁

野の白立園の母方のゆりたる  
翁

何の枝の白と赤のゆりたる  
翁

何の枝の白と赤のゆりたる  
翁

古将監の古家とて

菊

月やその折の木比りのい  
松人ふれハ折りくの  
ふき手煙文の村り末

枯屋  
其角

松

雪の松折の尺れハ折ま  
りのちりおれあま  
い春を一船信の打りけ  
万とまきうハ大なる  
みりゆら風ふつハ青月夜  
葉をかききて庭下島地

孤屋  
菊  
子酒  
桃隈  
利牛

菊

雪のふの大松若ふと折り  
一通りゆく木うハ  
赤枕揺ぬ神を織ま  
火のまきさしく古且折の内  
物の葉のまき言かきて月の色  
うハらまきさしく折り少

玄命  
舟竹  
菊  
竹

元禄七甲戌

菊

梅のくにの折り木の  
雪ころしり折りの  
なまき語をまきさしく折り

野坡





まゝ此まもすれぬ守人  
は市の湯治を返る花さうり  
磯多をこいし喜喜の如木  
堂のたかき東の方をまをり  
魚子うい飽後の新枝  
おき島一歌（二言）一東  
未をの言ゆえてぬ舞羽  
晴くましくきり坡をまて本  
屏風のうけの尺ゆる葉子魚

坡 坡 坡 坡 坡 坡 坡

藤の花さうりか片一葉り小

箱

牡丹のちいれぬむら  
みーの歌で月はいりぬ取一  
壁をくまきく習志を替り  
まよりふ移りいりるのり  
お口とくする金山の砂  
吹伝し歌もおこるすは社  
いのも葉のこよある湯の泉  
大のまればゆされぬは紀  
稿きり向をかりるころや色  
高浪や曹洞寺のよけとめ  
漱のりきよりりぬる月代  
せふり朝ハ能く伝るれ

千川 涼葉 友研 川 扇 松 紫 山 川 扇 山 紫

四十八

すのこも木をハス身一ハク  
巡礼の泊入松の身のくま  
兄より兄より話よ松の  
花足んと杏る身中の暖く  
くまハ梅子さきり。あま  
何しき海物身の膏を忘はる  
ありあくく。く。片木の  
湯よりのは衣干百をまら  
晝の破れり。入る。か  
さひ。き。積。く。門。を。ハ。き。と。ま。ら  
あ。の。さ。の。記。ハ。何。の。山  
新島寺の葉の葉のかりそく

松 川 山 葉 篇 葉 松 筋 松 遊 川

海屋の門をくく月の歌  
人足の費目引所あ葉つて  
玉を甲れそ葉足きく  
葉むくそくはさひ。死。変  
海あき。雨。さ。く。蝶。の。身  
随。分。の。か。す。く。葉。を。つ。く。ら。の。心  
火。子。か。や。き。一。門。の。強。物  
院。内。子。守。法。門。を。ふ。は。の。身  
喉。と。き。れ。し。や。さ。む。ま。ま。く  
は。ま。ハ。の。身。を。さ。ふ。花。の。け  
埜。の。せ。の。足。の。昔。代

葉 大 舟 筋 葉 川 葉 舟 葉 代



主人もどめハ病そのくわ  
 結搦れ者きけりきう入  
 尺女よりたへるハ引こむ  
 元とけしてしるはるるの月  
 すとて花もあふも麦のそ  
 柴桑の葉こころとほりて  
 不くく木より人子とのい  
 いそりし一向指し供支  
 養ふむ自の隣きりし  
 くの宮とまきり朱屋と海  
 の田の玉窓をこ籠りたこむ  
 庵に前かまふ花のさかえ  
 小舟は廻り流の山あり

瑞 素 珊 風 瑞 素 珊 風 素 瑞

執事

瑞素

新まはるきとすふぬそ色小  
 中にお故懐のきえりう  
 了付のこころしきひしお  
 四五多るのねりま止  
 方より醫者を引する月の  
 踊り他は法鏡もおわしに  
 金さののけりちれき  
 けりうものりきき  
 道生を志を止る可あり

山 店 瑞 素 珊 風 瑞 素 珊 風 素 瑞



物子もよやとさする夫目  
花のうらうらと山をさすつと  
夜も終るる黒谷のそ  
翁

多難のよと人のよとや作谷泊  
苗の葉も舟をさけとむ  
釣風子むふふ合胸を吹ま  
大きな肉けけけ生りの  
さくやまの暖さるるあふ月の秋  
と山もさする標きのあ  
耕作のよとよとよと初所し  
翁

豆腐味のよと作谷泊  
尾馬の隠るる葉もさすつと  
雨の降るるさするさする  
蛇塚のりらと葉もさすつと  
蒼きよとみれ上り門の扉は  
切妻しゆらとさするさする  
おれもさすれさするさする  
さするさするさするさする  
袖もさするさするさする  
咲もさするさするさする  
おれもさするさするさする  
翁

五  
三

五  
三







小瓦しき並み味のくく何  
謂分のちどりく起る高きり  
梅咲そ免て立花さやく行  
手中を松の内より料理喰  
伊東の快りのいそしき真  
上紺の木綿合羽をかき指さ  
湯屋の手さきくハさくく  
君月の掬取五手可く一合  
一分してとあふ梨のきれまの  
玉味喰の佳境よりく秋の風  
不足ぬちをそ強持する  
右の手の押ひ次物に依る本

本・化・末・化・末・化・末・化

点くけしやのあはれめ  
此節をより大いして通る能く  
春の風よりわくく又之の風  
春めふる石をたぬらり水端  
陰体をさきてする士り合と  
月くくふねの塔梅を星と  
柳又柳よほく霧属  
志りふ言を踊りむくと心きて  
本よりくく可き事の傍寄  
まらるるくくの望みゆき  
みゆと知るるくくおのこ積  
春くくくねくく花の咲くはれ

本・化・末・化・末・化・末・化



獵場のろりおあがり集  
 新の内息をうするとおきやう  
 解つておけけけけおきやう  
 羽子板のふきこて一丁一節のほ  
 借上しよとあしめぬ  
 藤小紋の綴の十法のすん  
 子舟さらさら秋八草より  
 比又舟をぬきとて山より  
 船のさしけの写りかきけく  
 角穿つて舟の底のけり  
 あしあきくる市の小屋掛  
 此ころの化物をふし新し  
 是 明 堂 然 考 学 末 是 明 堂 然 考

聲と響けあきとて換  
 お局の里にーハ賑くみ  
 海とてあより物のわー入  
 花のよれきとてく止ぬ字通  
 くられ一ととりの特  
 是 然 翁 考

閏五月廿二日首柿倉花吟  
 松骨解に露ハすし初吉素  
 万引 花よりそ中。の 稗  
 村菴里よりあきかめきて  
 帰るけりすきあ石 垣  
 月跡の川あふく心舟の 端  
 是 素 堂 吉 末 支 考 支 草

小いしうりて砂子思つく  
上をきくそくはさそふきき  
手桶も入るお通りの法  
飛ぶも念ハつたものごとく  
文工の物作りは鏡をうけ  
井桶のよみ取掛の唐土の先  
位りもさかして酢味噌をやる  
海かきもさかして高の志しと  
地しやあきりしうりて  
折紙を焼く紙とあきり  
とろろしきお標の木の家  
月花子らひさき門をわたり

惟然 翁 末 堂 然 翁 末 堂 然 翁 末 堂

業おるす吹の上の板  
陽をよめおきけしうりて  
新巻のかさのゆらりと  
氏口のうりてをさかして  
運いをもよめおきけし  
うすさの一本の庭の  
けあはさんと次の田  
おいそこの細を籠の  
陸のゆきおきけし  
幕礼の法してけしおきけし  
子ぬらひねしおきけし  
川いとも渡してさかき

翁 末 堂 然 翁 末 堂 然 翁 末 堂

五十九

是等のきくく 田上の虎  
正月もやよハきハ廿日  
持つけし末のときの名代  
咲きの行なう 砂子場松魚  
ひんもくけてお傍さやく  
白粉をぬれしもの地尾心  
級者持 松の衣のぬふり

子 考 然 末 堂 子

夕やちや 夢子場をさるる  
あつをふさく 藪の下の  
ちんくしと 海際と 沙魚の  
けきをて

野 有 翁 惟 然

了のちんくく 八のり多人  
一葉の珠て 海うふれの月  
解子 種 養子 庵の 坊 多  
松茸も小信 持ねハきく  
かすゆう 生と人 子 け  
甚そのけき 多 級 屋の け ぬ  
松の 張 老 子 尿 瓶 さ け  
子のひん けいひん けい けい けい  
そめ 百子 いく 度 志く  
欠ふくしと 川 けい けい けい  
糸の 味 多 けい けい けい  
月 影 けい けい けい けい

野 明 然 翁 然 翁 然 翁 然 翁

馬戸のたぐふる初瀬の咲種  
花の多し一葉の如くおもしろ  
去はるる一葉の如くおもしろ  
湯谷の田舎役者の藪の通る  
伊勢に吐く料理乞ふら  
柳の本をすすむ風の写る  
尻と結ぶ如くおもしろ  
候とくも言ひやくの月  
きくくすきくや糖の中  
秋もくやいふくも来よう  
合点のゆるぬきのかし木  
狼もを結ぶ文も浮花全

川 始 星 川 始 星 如 行 鹿 川 吹 然 弱 吹 然 弱 吹

木より抱付て取く音  
作らるる音もて多知事  
の厚け島々上田の如く  
互の如く鳴かきえる  
荒くさうししか  
流るる如くハミ渡の中  
此内末より 結ぶ 櫻 炭  
昔くく花のりく思ふ  
くくハ如く春もすす

川 始 星 川 始 星 如 行 鹿 川 吹 然 弱 吹 然 弱 吹

みくはるや夢の場もとらふ空

有



倉廩はるくは芝原の春  
 野をて帰懐ふも也崖の春  
 所老の役年をぬ高智  
 多子しとよ入ていふふ  
 松のみとよまきしとて  
 外一程の塵年ある二人  
 心ま心くくさるの春坂  
 子外しきのふの平年のうさ  
 夢おしとくお相新の度袖  
 新波なる花の新所よれよ  
 みるくさくし松山吹  
 之道  
 吹 来 然 吹 来 然 来 吹 来 吹

夏の夜はくわいての冷し物  
 高きそくくさるの春の極先  
 掌ハハのほくさるく入て  
 古く草葉に反旅相しと心  
 月影のちとさるの春の春  
 志中しし跡をさける松翠  
 松を特坊のぬくゆい迹し  
 山くく石くさるをさるわす  
 飯糰さる面桐さる心火打経  
 さるく工史をさる思降  
 おれくさるさるさる松の香  
 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁







中火ふくむしりてきりかぎり  
縮着しと強をさききりてたうた  
名はゆへに何れを付もたう  
の月の餅と書つる事奈子稿  
ていへいりりりりりりりりり  
萱草ハ志つらりと陣秋の雨  
いり付てと訪者上自心  
女房子共さうりぬえは情  
尾大これ武士の二重なるえとも  
去る家の感竹ハ杖子代さうり  
因りそ妙子さやの不二坂解  
故の居る人さうりておんあとの

社 龍 葉 文 通 考 腔 就 文 龍

酒場と名を付て看るし  
病ぬゆき結白くあふる花差  
望ちく向とあえとん

五 通 龍

六月廿一日

秋ちりくふららるのよるや四尋半  
志とらりりりりりりりりりりり  
月残る秋ありの大新あ清  
起ると浮きりりりりりりりりり  
海すりりりりりりりりりりりり  
子のゆふいで鞠あ工する  
夕坂をくくし味ハ結を待

木 節 情 支 考 考 考 考









干かきくひくひの志気くき月  
神主の法儀をたて上りて  
志きくく岸の体心代士  
衣更々結すくくく新し  
かきくくさくく岸のふお  
耳儒をそりくくく枝のさき  
行義の悪くく岸のふく  
大少くく岸のつひの花の  
宋の朝子のくくく二

白力翠粧芬菊袋翠

法かきくと第をもくくく枝のさき

望翠

牛のくくく色を神河くくく吹  
初月の難きくく岸を振く  
すれはすくく岸の豆腐受きく  
大八の通くくく岸の狭小  
ゆきくく岸のくく岸の川  
中一の生を魂くくく岸の  
路入のきくく岸のくく岸の  
杖くく岸のくく岸のくく岸の  
一任岸のくく岸のくく岸の  
籠釣くく岸のくく岸のくく岸の  
大さのくく岸のくく岸のくく岸の

惟然 去等 雪空 粧魂 九節 車袋 芝 然 然 箱







——ぬ山嶺をさるるやうをて  
芳のうらやも足くう香煙花  
芝のうけやうたの掃と先  
骨ふあれや肉ふたう人との  
野毛のいづれをかたのや極  
せひきらひさう海はふけり  
みけひする髪をさほくおしる

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

松風より新風をさるる松葉か  
月よりさくく石垣の上  
河の門おいて麻の飛らえ

支考  
旅 籠  
舟

見たりハ嶺名の籍を引する  
せりともおわすく切うつらと  
この山よりけむり 中門  
藤おふつる辰の尾はきれに  
床て天をさるるくと別  
更ひす傳行の終もさる提て  
喧嘩の中をさるる引のけ  
仕合と矢楊の舟ものうあん  
ゆふけと餅のゆふれうつ  
やあ(と)位ふもさるるはさる  
大工尾根屋の隅の隅  
月のあつむらうけぬ藪味

雪 雲  
惟 然  
車 袋  
望 翠  
考  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

向の海は好景白ゆにや  
まはるきと至草しても回一秋  
親とふ字をいしうていく秋  
月影又々之より黄白仙  
かりと蕭条の終はゆ  
咲の秋は多幸の味をさう  
師寺もいけてはたふ極極  
孝と精のけしめの終をす  
肉をのりる子供をうれ  
是湯の門のき入るにさう  
一里の舟と後の子をうる  
山は丸密柑の色の黄をす

者 袋 紫 醒 者 其 袋 紫 醒 者 其 袋 紫 醒 者

なふれてくる 畑の家 窓  
母方のくまをたて月の物さひ  
嵐の籠る 老生果の 中  
傍寄の雲をたぬか入粒の向  
さくれやうは海に志むし  
か倉とハむくひ命きのこの身  
せんとの風子人死りあつ  
あをさふふよむちけ御ちかて  
たけけえ路のまを 切  
漸々今ハささるる 為 智 証  
か滅の業志のさうとむ  
消滅をさうしてふれハ

者 袋 紫 醒 者 其 袋 紫 醒 者 其 袋 紫 醒 者



山とく明おのりきききき  
寺ありれきき葉のはの概概  
山子門あつるのの月  
神風ふくけの人のうけ也  
まの味光の候のふい  
尺して通了純三針ハ花の足  
翁持心くくくくくくく  
こら風の又西子葉わよ  
家子くく糸を大くくく  
怪味の肉交ハく度屋きく  
喧嘩のきくくくくくく  
大切れくくくくくく

翁然者翁然者翁然者翁然者

まのくくくくくくく  
まのくくくの床掛ハく出家  
真のききハ追季の他  
酒くくくくくくくく  
赤難路を施の正  
さくくくくくくく  
白梅のくくくくくく  
くくくくくくくく  
大工はくくくくく  
米搗もくくくくく  
かくくくく市井を押し  
此何くくくく生ハ花のきくく

翁然者翁然者翁然者翁然者

野のゆきゆきのささめけり  
考

松茸や初子らうま山の取  
惟然  
去芳

雨子蹤手の志さふ秋月の影  
翫雅

おとしるく啼す月の影を  
翫

すと入人あま次の片の影を  
翫

くこひさるさりそここ互を  
翫

くのささらみる夜来し啼す  
然

冬はけぬ熟林をとむすうう積り  
翫

至て也う一一停葉の影後を  
然

底をくくて古風の茶を造る  
然

肉を茂むし未の海のとれ際  
翫

ちをつまる又と痛める泣をける  
翫

とを青は冷の湯を生の青を  
翫

とのめらるあまくれて一一  
翫

尺すの片をかく魚の肉  
翫

弓をとりはらへ丸の外  
翫

行よの市にてしを成る長舎川  
畦止亭の月を見たり

外をあしかふあまる月見るれ  
翫

秋のゆきゆきに魚の影を  
畦止

家の所を地を新造し花咲て  
川のほとりをさすこのむ中一脈  
此下ろと赤て去月を尋ぐり  
板の枝をねるし色く  
海川よりけ玉笈を引て尺の  
火のほとりより岸のつた河  
道とれハ板のうらんの流る  
坂下てく一里ほど末  
思けし子と去るし牛の糞  
村のむ尼女子集し窟  
嫁とくハ女とくし時をりけ  
大よりく子此秋の雲やけ

惟然 酒壺 支考 之道 青流 止 然 壺 翁 流

けの雲を又晴くす船の月  
すきの中へ蟬々たる心  
桐子をして多枝く遊ぶ世の  
折くくくぬまの旅人  
阿くくく浪のまはるの山  
志くくく人けくくく系  
め川きくと油のまはるく  
又くくくやう雨折見え  
名号をくくく尺きことし  
竹橋のくくく山川の末  
大船も阿船をくくく秋を  
名後意くくく月の子やけ

是 止 者 然 翁 流 壺 翁 流



ゆきふれて宿まの月子心ねおきよ  
半道他へさし隙ふたむす  
音くしうと耳ふも物くも  
地へ志ぬるほど時向ふうらむ  
管のはかりうそて一羽 籠  
ありあきあひの指さけては  
船人を海にのぼさう三升の種  
枯と葉をばらばらに  
人への尻を尻くぬ花さ  
咀のくつきをばらばらに

菊月廿二日江車唐車

止 堂 流 考 然

秋の夜をさすの月子心ねおきよ  
月よりの月よりの月よりの月  
西の山にたかたかたを  
走、ゆるゆるのよこここ  
男の尻をばらばらに  
小袖をかきかきかきかき  
使やうもやもやもやもや  
かへてと醫者の足さめれり  
城のまをまをまをまを  
家へおのりおのりおのり  
紀より尾谷へけしきり  
すききりおのりおのり

篇

車唐 酒堂 游力 湘竹 惟然 支唐 箱 唐 堂 力 考

花の末ぬねハ高嶺より百の坂  
両岸の月の不ろき川 筋  
火くもーくま沙をさる後々  
七種ヤしハよろしに際ふ六  
兄さるは高嶺の麓花やう年  
小庭形あ〜ふを秋のま

然巻力篇盾

所思  
此そやけ人きし手秋のうれ  
吐のさくけの末うりくさ  
月〜む夢まのむれまの終て  
ちんまや家をむし〜らむ

遊力 支考 泥足 篇

了季合羽折を入し何物  
ほ〜い〜の〜の〜の〜の〜  
けけぬさるの〜きまか〜  
唄のさるい〜おふ梅あ〜  
縁急〜まの〜の〜の〜の〜  
蛭子の跡の跡のきき〜  
けハ〜の〜おす〜の〜の〜  
かく〜の〜筆〜す〜の〜  
け〜の〜と山田の臨ハ〜  
坂の麓の野の秋ハ〜  
け〜の〜の〜の〜の〜の〜  
塩飽の船のと〜と入らむ

調行 車音 酒壺 睡止 惟然 危柳 足 篇 腐 考 竹 然



河さしと色うつくふ雪の茎  
雪のくしは山うふる風  
紫雪の露のそ供まきとを  
清露はくし夜のしむし  
上はの橋の雪ふる川の方  
植田の中を勢のたまつく  
小かすひは不許を燈しあまぐ  
行ぬ仕かしのとやる草操  
有教も雪を籠る月の夜は長  
枝一本も雪の根さし  
雪のそれも神のぬきされて  
雪のらくしに娘はしりる

雪 女 翁 竹 然 翁 中 女 翁 川

餅らきる露のほしりの娘りさ  
妻ぬ雪の積りくさあは  
河の水のほそまきうさあきう  
板のさし木さしう伸り

雪 女 翁 然

百葉平板の木下ういのり  
第しを枝うり山と家  
味うし程ひと影の輝られて

翁 浪 化 雪 未

新くまよけよしのを伝麦  
田柿く伝く板の節起

如 舟 翁

兼程ありむしらのけや夕陽に  
出翠  
帯けけゆく空陽の花  
翁

いあつひの歌うえの戸はくれ  
六著  
さしけ境のひの夜  
松籠

清きわの海の小舟の秋立て  
翁  
またれりるのちを秋のち  
翁

又和むしるのちを秋のち  
松籠  
松籠こむの山の中へん  
翁

おしやむるさきりる松の春  
雪は  
松籠

松籠  
翁

秋風を吹れて春の海あり  
酒本

依てあけけし松の籠  
松籠  
松籠と新風の里をささぐりて  
翁

年歴不知

松籠すすらひのけりるみま  
七集

誰おもしるくさゆのたそひ  
新六

山さしりし松籠の丁子風を  
翁

長心羽折と四五子まのうら  
翁

吹されて松の籠の月さるる  
十那

格をば折 きのほるさゆ収  
いし 網干場をきよめさるる  
阿の 笠をみたり 八の 何の  
外 的の 器を 題の 印を きて  
天 言り ねと 地を けん あり

何れも 染吹 風を ぬれ  
白の 文を 生 けり けり

こころ あり あり あり あり  
不の 鬼 大し しの 法の 大  
箱

かれ果る けり けり けり けり  
雲 飛つて きて けり けり

鳥山 や けり けり けり けり  
可上 けり 破り けり けり

青の けり けり けり けり  
芽 あり けり けり けり けり

望 遠し けり けり けり けり  
及 けり けり けり けり

そのきぬのゆきハはく  
せうくみまて六位のしんすれ

くふまみはくくくく  
尾のりくくくくみくの横

はのりく火くくくく  
くぬの百玉のお線のおりき

はくくきくくくく  
二河内く西く破のきくく

板の風ハ豆かく  
くくく板くくく

くくく板くくく  
小僧くくくハくくく

新解の弦くくく  
象急ハ色紙を替る

字目くくくく  
すくきを切て選く

きくくくく入  
きくくくく入

後おもしろく梅の影よく  
 更科の里の破をゆかりの  
 端をくられしゆきみ石竹  
 庭ありくきくふくしと物と心  
 新つ志くしのかひなくもあれ  
 隙ふふ所くく猫の志 白  
 人しるぬ中を火燈をもよれ合  
 沙走の夕氣折 折る如く

梅千一草後の折走人つ志  
 石竹しるぬ中を火燈をもよれ合  
 蝶掃のそり大くさる如く  
 白の人のと中ノ志くく  
 種つく人もにしし時方  
 釣ひききお折るも雪の降くふ  
 梅もさるしる市のゆきさる  
 大和路へ入るをさるさ花曇



此一きのうのうらハかろく 能く  
きのうのうらハかろく 能く

俳諧一葉集附合之部 終

東都書林

下谷御成道  
青雲堂英文藏板

俳諧故人五百題

松尾房撰

全二冊

掌中故人五百題

横本全一冊

續故人五百題

一具庵撰

全二冊

發句五百題

白雄房撰

全二冊

新五百題

田森房撰

全二冊

新五百題

全撰

全二冊

近世五百題

笠原為以撰

全二冊

嘉永五百題

寺川為撰

全二冊

今人五百題

東眞撰

全二冊

續今人五百題

梅本為山撰

全二冊

同 三篇

全撰

全四冊

十萬發句集

洞海舍撰  
一具庵校

全四冊

叢句類聚

八采園撰

全二冊

名所千題集

田表庵撰

全三冊

今人百家類題

邊日庵撰

全二冊

近世十家類題

全撰

全二冊

近世名家類題

全撰

全四冊

題林發句集

由警撰

全四冊

乙二七部集

全二冊

蒼乳翁句集

邊日庵撰

全二冊

俳諧一葉集

芭蕉翁一代集

全五冊

同 浮集

全文消息

全四冊

佛譜四季草

善徳上人の家集

全四冊

全集草

全

全十六冊

嵐雪句集

全二冊

風俗文選拾遺

全二冊



天下

登龍丸

會物一切一包 代百文

方

一巡代六百五十文

此丸は天下四方我家の秘法にて...  
 あり醫へ十年廿年...  
 亦此丸一巡り数年...  
 如く瘧と治し...  
 類は是れ固く...  
 潤い乳力をはし...

病延命くろりり敷万人用ひ試て生功の太きるる古今無双  
希代不忌候の外業之生功尤ふきる候

一十年廿年為息 一勞忘の候 引風の候

一からせと 一調候せりつと 一瘧疾の候

一瘧疾小血交り 一瘧疾吐て毛出 一動氣はじり心肝

一小儿百日疾 一婦人産後腹痛の候 一瘧疾少て胸痛

一瘧疾少て乳産り 一紫外瘧疾為飲り起る病一切みはし

一瘧疾少て乳産り 一紫外瘧疾為飲り起る病一切みはし

一瘧疾少て乳産り 一紫外瘧疾為飲り起る病一切みはし

一瘧疾少て乳産り 一紫外瘧疾為飲り起る病一切みはし

一瘧疾少て乳産り 一紫外瘧疾為飲り起る病一切みはし

一瘧疾少て乳産り 一紫外瘧疾為飲り起る病一切みはし

一瘧疾少て乳産り 一紫外瘧疾為飲り起る病一切みはし

一瘧疾少て乳産り 一紫外瘧疾為飲り起る病一切みはし

一瘧疾少て乳産り 一紫外瘧疾為飲り起る病一切みはし

一瘧疾少て乳産り 一紫外瘧疾為飲り起る病一切みはし

一瘧疾少て乳産り 一紫外瘧疾為飲り起る病一切みはし

一瘧疾少て乳産り 一紫外瘧疾為飲り起る病一切みはし

東叡山御書物所用

御書物所

江戸下谷御成道 青雲堂英文藏製

大板屋敷

出重与文治并

大板屋敷

大板屋敷

後府江川町

河内屋敷

出重与文治并

大板屋敷

河内屋敷

山本屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

河内屋敷

